

【研究報告】

## 新湯再生プロジェクトの可能性と課題

### 教育の質向上にかかる試金石

Potentiality of Shin-yu Restoration Project:  
Touchstone for enhancing the quality of education

佐々木 豊志<sup>1</sup>, 藤 公晴<sup>2</sup>, 下條 真司<sup>3</sup>, 後藤 欣司<sup>1</sup>, 前田 済<sup>1</sup>

1 総合経営学部, 2 社会学部, 3 ソフトウェア情報学部

#### Abstract

This paper reports on the Shin-yu Restoration Project, launched by Aomori University in 2019 to revitalize an off-grid hot spring lodge within Towada-Hachimantai National Park. The facility, unique among Japanese universities, provides an exceptional setting for experiential and embodied learning under non-electrified, radio-wave-free conditions. Through multi-year fieldwork—including water supply restoration, bathhouse repair, environmental management, and ICT-based monitoring—students engage in collaborative labor that fosters non-cognitive skills such as teamwork, communication, problem-solving, and resilience. Supported by external partners including the Japan Association of Professional Engineers and the KDDI Foundation, the project integrates outdoor education, digital and green transformation initiatives, and community engagement. Findings indicate that embodied tasks and cooperative living play a crucial role in cultivating tacit knowledge, sense of responsibility, and environmental awareness. As a rare educational practice situated in a national park, Shin-yu serves as a touchstone for enhancing the quality of higher education, while also contributing to regional revitalization and aligning with Japan's policy emphasis on interdisciplinary knowledge creation in the VUCA era.

**Keywords** : Outdoor education, Non-cognitive skills, Interdisciplinary studies, University-community partnerships, Embodied learning

#### 1. はじめに

本稿では、筆者ら青森大学の複数学部の教員が2019年から合宿形式で取り組んできた新湯再生プロジェクトを紹介する。

新湯は後述するように、八甲田山中にある温泉施設である。国立公園内の源泉掛け流しという特徴のみならず、現地の環境容量と未電化・無電波という条件のもと、野外での生活技術や他者との

コミュニケーション能力、観光コンテンツ開発やIT技術の活用、災害時の対処能力の向上に加えて、環境保全にかかる責任感や社会のあり方に向けたイメージや価値観の醸成など、実践的で複合的な教育価値を有している。こうした施設の希少性と教育の複合性に加えて、GX (Green Transformation)・DX (Digital Transformation) の人づくりの観点や若者の体験機会の減少に対する社会的

な問題意識もあり、近年、公益社団法人日本技術士会東北本部青森県支部やKDDI財団、地元事業者などによる支援を受け、同施設再生への動きが顕在化してきた。また、同プロジェクトは、文理融合と研究者間の協働、地域社会との連携という側面をはらみながら発展しており、今般の高等教育の質向上や、内閣府が進める総合知の活用に向けた動きにも関連している。

これまで、新湯再生プロジェクトについては青森大学附属総合研究所が発行する「総研だより」を主に、2021 年以降その活動を報告してきたが、今回、プロジェクトの実績が一定のレベルに達したため、このような投稿に至った。また、上述の学びの複合的な側面は教育実践と研究の両面において、昨今の大学教育の質向上の知見にも関連づけて論じることができるため、本稿後半は、そのような大学教育の質向上の視点を踏まえながら本プロジェクトの可能性を論じる。

## 2. 概要

新湯とは、青森大学の経営母体の学校法人青森山田学園の木村正枝理事長（当時）が、青森短期大学の第1期卒業記念事業として、昭和47年から十和田八幡平国立公園の第2種特別保護地区（国有林野）を借用し、「青森短期大学八甲田ロッジ」の名称で設置したものである（図1）。現地には、宿泊用の建屋が3棟、脱衣用の建屋が1棟あり、そのそばで63℃の源泉が湧出している。収容定員は二つの宿泊棟が使用可能となった場合で20名程度である。同地へのアクセスは酸ヶ湯キャンプ場手前を起点とする登山道（旧城ヶ倉溪流遊歩道）のみで、距離約800m 高低差150m 程の場所にある。また、温泉のpHは新湯周辺で概ね1.8である（酒井ら1964）。

場所：青森市大字荒川字南荒川山国有林

面積：0.2180ha（建物敷、水路敷、取付道路敷、林地敷）

## 3. 再生プロジェクトについて

### 3-1 再生プロジェクトの道のり

新湯は、2010年頃まで当時の青森大学大学院環境科学研究科の実習・演習や自然体験活動指導者養成講座の一環など、定期的に活用されてきたが、



図1 新湯周辺地図（地理院地図抜粋）

<https://maps.gsi.go.jp/#16/40.646066/140.841368/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>

2012年の大学院募集停止後は使われることがなく、建物の老朽化と敷地内の繁茂化が進んだ。

こうした流れに対して、2019年7月に新湯再生プロジェクトの先駆けとして、総合経営学部（佐々木豊志ゼミ）と社会学部（藤公晴ゼミ）が合同合宿形式で同施設の利活用について検討した。

同施設は上述の通り、国立公園第二種特別保護地区の、林道などのアクセス道路がない極相林に近い区域を借用していることから、放置・解体の場合、現状復帰が条件の為、多額の費用が生じる。その一方、このような温泉・教育施設を国立公園

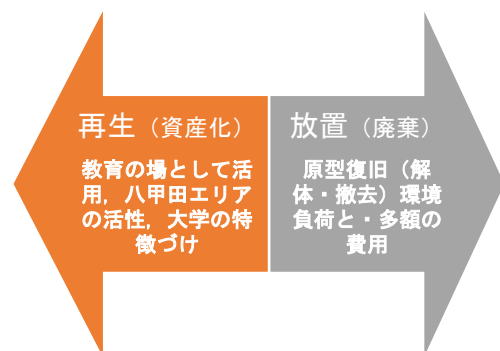


図2 新湯の再生と放置の対比

特別保護地区に有する大学は全国では他に無く、未電化地域の通信情報インフラ、観光、薬草、植生などに加えて、希少性があることによる宣伝効果、年間数十万ほどの投資で大きな効果（PR面も含めて）が想定される（図2）。

次ページの表1のとおり、再生プロジェクトと位置づけたのは2021年度以降である。まず、7月

表 1 合同合宿の歩み

年度	滞在先	作業内容 (学生数)
2019	東北大学植物園八甲田山分園	現地視察と利用構想(6)
2020	コロナ禍で実施せず	
2021	酸ヶ湯キャンプ場	下草刈り, 水源確認, 水道パイプの状況調査(19)
2022		給水管の状況確認と復旧(18)
2023		給水管下部の復旧 (16)
2024	大学モヤヒュッテ	浴槽修理, 建物の清掃・修理・解体, 備品確認, 地面整備, スターリンク接続 (27)
2025	大学モヤヒュッテ	浴槽修理, モニタリング調査, 資材搬入, 3Dモデル用撮影 (90)

に同施設が遊休資産化する直前まで活用していた藤田均名誉教授（元青森大学大学院環境科学研究科長）を迎えて同地の水道や温泉の仕組みについて視察を行った。そしてその夏、上述の2ゼミが前田済総合経営学部総合経営学科長（当時）と其田知志客員准教授らの支援を得ながら、3泊4日の合同合宿を実施し、敷地内の草刈り・廃材等の撤去を行なった。

2022年度は、公益社団法人日本技術士会東北本部青森県支部（八木澤聡支部長）の支援を受ける機会に恵まれ、技術面とパートナーシップ面でより確実な再生の足掛かりとなった（詳細は後述）。

とくに、飲み水の確保、63℃の熱水を下げるという観点から、不通状況であった水道管を、大雨の厳しいコンディションの中で、水源から一本30mの管の接続状況を確認しながら、150m程復旧させる作業を合同合宿で行なった。

2023年度は新湯までの残りの約540mの水道管（30m×18ロール）を山林の中に敷き直し、復旧させた。

ゼミ生の関わり方として、本プロジェクトへの参画が、藤ゼミでは選択式であったのに対し、佐々木ゼミ（3年生対象）では必須であった。このため、佐々木ゼミ生が現地での各種作業に加えて、装備班、広報班、食事班のいずれかに属して、ゼミ合宿全体の準備運営に携わった。例えば、広報班は同プロジェクトのプレスリリースや報告書の作成

を、食事班は合宿期間中の献立作成、買い出し、調理を、装備班は修繕用備品やヘルメット、寝袋を含む装備の準備と管理を担った。

### 3-2. 再生プロジェクト第2フェーズ

水道復旧により温泉を含む施設利用の可能性が大きく広がったため、2024年度からは、同プロジェクトの第2フェーズと位置づけ、関係機関との連携による施設のSDGs的な利活用化を目指している。とくに、総合経営学部の後藤欣司ゼミとソフトウェア情報学部の下條真司ゼミの参画により、通年型の観光コンテンツの開発やワーケーション、米宇宙企業スペースXの衛星通信網「スターリンク（Starlink）」活用によるリモートモニタリングの実証実験など、現地における教育と研究の幅が広がった。現地の無電波・未電化、最低限のインフラという状況下で、Starlink 活用による通信・情報インフラ、生活インフラなど災害時と平時のDual mode infrastructureの構築に向けた実証実験と、八甲田ロープウェーのオーバーツーリズムなど局地的な課題の改善・解決に取り組む計画で、KDDI財団の協賛を得た。

2024年度から教員4名体制で、活動が多様化したため、従来のゼミ合宿以外にも年間を通して現地訪問の機会が増えた。例えば、宿泊キャビンのテラスと入り口階段の撤去、施設間の通路整備、Starlink 活用によるデータ収集・調査などに取り組んだ。また厳冬期には今後の冬季間における施設利用を想定して、氷点下10度下での機材の稼働確認を行なった。



図3 2023年度7月、日本技術士会東北本部青森県支部総会での活動支援報告と、前田学部長と学生2名の発表の様子



2025 年度の合宿は 8 月 18 日から 22 日まで計 5 日間、同 4 ゼミに所属する 90 名の学生の大半が日帰りで参加し、主に浴槽の改修工事を担い、完成させた。また、地域貢献演習 J(担当:下條真司)の受講生 13 名とゼミ生 2 名は、上述の Starlink 活用によるリモートモニタリングの調査を行なった。

#### 4. 外部機関による支援と協力、連携

新湯の再生には、様々な分野の専門的知識と技術、費用が必要で、そのほとんどが外部機関による支援と協力によるものであった。まず、公益社団法人日本技術士会東北本部青森県支部による支援は、2021 年 7 月の同支部総会の頃に遡り、同プロジェクトに伴う様々な技術的な課題があるため、同会に技術支援・学生指導の可能性について相談した。

環境への配慮や経済的循環、若者の育成などの SDGs 的な視点が含まれており、同支部の活動計画の SDGs、とりわけ「12 使う責任、作る責任」と合致することから、2021 年 6 月に現地調査を行い、7 月の役員会で決定した。それにより同支部の企画委員会副委員長の高山幸克氏（所属：齋勝建設株式会社）を中心に水道の復旧や浴槽の修繕などの技術支援を受けてきた（参考：図 3（後述））。とくに、2025 年度実施の浴槽改修には、浴槽補強のための鉄筋と骨材、セメントなど 3 トン近くの資材運搬や生コン打設などの労務が伴うため、齋勝建設株式会社と青森大学 SDGs 研究センターの間で「青森大学新湯再生プロジェクトの連携に関する覚書」を同年 4 月に交わした。その他、同支部から提供された以下の技術的な計画書などをもとに修復の作業を行なった。

2022 年 6 月 新湯管路点検留意点

2022 年 10 月 青森大学八甲田新湯温泉再生プロジェクトへの支援報告書作成

2023 年 8 月 整備合宿作業内容説明資料 給水ルート案検討

2025 年 7 月 青森大学酸ヶ湯新湯再生プロジェクト浴槽改修工事 施工計画書作成

また、本学経営学部卒業生の小枝孝太氏（株式会社小枝設備工業）から水道と温泉の復旧にかかる技術支援・学生指導を 2023 年度の合宿から無償で受けている。

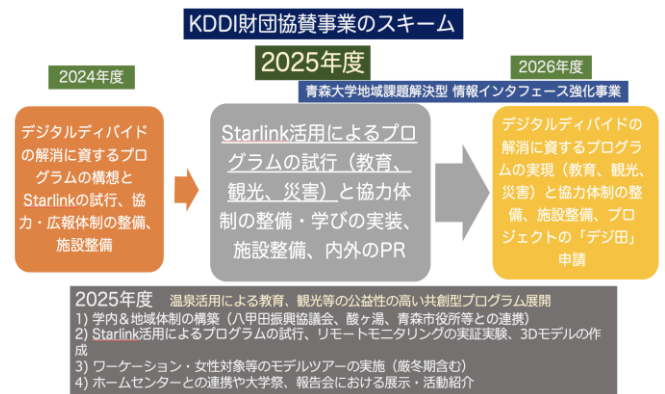


図 4 新湯再生プロジェクトにかかる KDDI 財団協賛の事業スキーム

合宿の予算については、2023 年度までは青森県環境政策課委託「令和元年度大学による環境教育モデル形成促進事業」と「大学による SDGs の考え方等を取り入れた環境人財育成事業」を活用した。また、2024 年度からは KDDI 財団の協賛金を活用し、情報の地産地消を通したオーバーツーリズムなどの地域課題の解決や GX・DX の人づくりに取り組んでいる（図 4）。

また、2025 年度から自衛隊青森地方協力本部、青森市地域おこし協力隊、酸ヶ湯温泉株式会社などの参画が見込まれている。

#### 5. 新湯再生プロジェクトの学びの特徴

同プロジェクトの学びの分野は、上述の通り、野外教育を基盤に、観光コンテンツの開発やワークーション、Starlink 活用によるリモートモニタリングの実証実験、災害時の情報インフラ整備、地熱エネルギー、環境教育など幅広い分野にわたる。ここでは、野外で共同作業が伴う点、環境影響を考えなければならない点、書籍など活字より対面でのコミュニケーションが軸になる点など、通常の屋内での学びと大きく異なる、学びの質に着目する。これらはいわゆる非認知能力、コンピテンシーの向上に大きく関わる学びであり、これからの人づくりには重要な側面を有している。

青森大学のルーブリックの 3 つの力は非認知能力に属するもので、例えば「2. 人とつながる力」に照らし合わせると、同プロジェクトでの共同作業は、2C4「目的に応じて、自分の考えや気持ちを

率直に表現し、相手の信頼を得ることができる」というコミュニケーション力や、2D4「個々の多様性を活かして、チームのメンバーに対し働きかけ、

表 2 2024 年度新湯合同合宿

2024 年度新湯再生プロジェクト合宿:概要	
実施期間	8 月 22 日～24 日(2 泊 3 日)
宿泊場所	青森大学雲谷ヒュッテ
参加学生	3 年生 9 名, 2 年生 6 名(計 15 名)
役割	記録係, 広報企画係, 食事係, 装備係
実施内容	1) 3 食の準備あとかたづけ 2) 倒壊したステップを解体する。(解体した木材で足場を作る) 3)最低限の草刈り 4)浴槽修繕, 水まわり整備, 宿舍整備
技術指導	日本技術士会青森県支部, 齋勝建設, 小枝設備工業

目標が達成されるよう、貢献することができる」というチームワーク力の育成に資すると思われる。

また、経済産業省が示す社会人基礎力では「前に踏み出す力(主体性・働きかけ力・実行力)」、「考え抜く力(課題発見力・計画力・創造力)」、「チームで働く力(発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力)」の3つの能力を挙げており、これらも非認知能力の分野に属する。これらのコミュニケーション力やチームワーク力は、各学生が作業や合宿のプロセスの中で育むものと考えられ、奥山(2024)の「野外宿泊研修の効果に関する一考察：青森大学の新湯再生プロジェクト合宿を通して」の調査結果の一部を用いて実証の一助とする。

同調査では 2024 年度の合同合宿に参加した学生 15 名を対象にアンケート調査(事前と事後)を行ない、コミュニケーション力やチームワーク力、問題解決力への気づき、関心について尋ねた。まず、事後調査の設問 12 で、今後の成長で必要となる4つの力(コミュニケーション力、チームワーク力、問題解決力、リーダーシップ力)についてそれぞれの重要度について尋ねた結果、86.7%(13名)がチームワーク力(協調性)と問題解決力を「重要だ」と評価し、次いで、コミュニケーション力を80%(12名)が「重要だ」と評価した。

コミュニケーション力の重要性にかかるエピソードについて、設問 13 で尋ねた結果の一部を以下に抜粋する。

現行ゼミ仲間との友好が深まったのはもちろん、他のゼミの学生とも、交流が深まって学年の壁をこえた活動ができた。

作業中に声を掛け合うことによって効率的に進めることができ、無事故で終えることができた。

紙面上の制約もあり、チームワーク力にかかるエピソード(設問 14)を以下に貼り付ける。

チームワークの重要性は、友達など元々知っている人よりも、初対面のの方が取りやすいことがわかった。理由としては、友人感覚だとあの人がやるであろうと固定概念が生まれるが、初対面の場合は、自分から率先して行動しないと何もアクションを起こさないからである

問題解決力にかかるエピソード(設問 15)は以下の通りである。

浴槽の担当でしたが、栓を抜いたら急に壊れてそこからどうすれば穴を閉じれるかを自分で考えることができた。

階段を作るにしても、解体した時の廃材をどう生かすか、その問題解決力が今回がこれだけ進んだ結果なのだと思う。

集団宿泊研修の必要性については、事前調査と事後調査を比較すると、事前調査で「必要だと思う」と回答した 44%(回答者数:12 名/27 名)から、事後調査で 73%(回答者数:11 名/15 名)という結果になった。また事後調査で「必要だ」と回答したコメント抜粋は以下の通りである。

今自分の置かれている日常は誰かの助けによって成り立っているため、自分 1 人だけ非日常的な体験をした場合への臨機応変に対応することや集団で動くための、規律を守れるかなど、自然環境意外にも社会人になるために必要なことが学べるため

宿泊を行うことで、今まで話したことのない人と話すことができコミュニケーション能力向上につながる。また、1 日目よりも 2 日目の方が互いを理解したからか作業がスムーズであったのではないかと感じた。

こうした非認知能力の育成について、2022 年の水道復旧のプロセスから技術指導に関わってきた高山幸克氏は 2023 年度の合宿後に、次のように評価している。

学生たちも、初日、二日目、三日目と目に見えてモチベーションが上がって来たことがはっきりわかりました。成果が見えると仕事の効率も上がるということが実感できました。学生たちは細かく指示しなくても、自分でやるべきことがわかって行動していました。そういう姿を見ることができたのも、合宿の成果だと思います。(高山 2023, p5)

以上、一部であるが、同プロジェクトの合同合宿の学びの様子と第三者の観察結果である。これまでも佐々木ゼミでは各合宿の活動報告書を発行しており、後藤ゼミでも独自の振り返りをとっており、これらのテキストマイニングを通した、より精緻な変容調査も今後の研究の一つになる。

上記以外の機会においても、参加した佐々木ゼミの学生が、大学祭や日本技術士会東北本部青森県支部総会で同プロジェクトの発表(図3)を行っており、2022年青森市学生ビジネスアイデアコンテストにエントリーし優勝した実績がある(図5)。また、同プロジェクトのウェブサイト構築とメンテナンス(図6)も学生らによる成果である。



図5 青森市学生ビジネスアイデアコンテストのエントリー内容



図6 新湯のウェブサイト

同プロジェクトの第2フェーズに入り、温泉を含む学びの施設としての利用が今後増えていくものの、宿舍や脱衣所、歩道、炊事場の整備、草刈りなどの細かな修繕・維持管理の作業は不可欠である。今後、学内・学園内の各部署や関係機関との連携による新湯での学びの実装を鑑みつつ、その特徴を整理すると、以下6つの分野が絡まり合った学びになる。上述のDXやGXなどの研究分野や多様な知の集いや創出にも関係してくる。

## 新湯再生プロジェクトの学びの特徴

### 1. 実践とプロセス重視

毎年再生の作業が異なり、それぞれの能力等に

応じた小さな成果の自覚につながる

### 2. 施設の利活用

浴槽改修や大工仕事、水路工、セメント系補修、エネルギーの確保、し尿やゴミ問題など暮らしが凝縮している

### 3. 国立公園の体験的学び

自然体験、野外教育、観光、ICTの利活用など環境容量や生態系影響、再生を留意した活動と教育について考え学ぶ

### 4. 身体性の濃さ

他者との協力による労働、状況判断、天候を含む自然条件を注視、リスク管理や災害時対応

### 5. 教員や専門家との親密さ(対話的)

密接なコミュニケーションとチームワーク

### 6. 文理融合、研究者間の協働、地域社会との連携が育まれる場

新湯は青森大学のキャンパスがある幸畑地区から車と徒歩で1時間15分程度の山奥にある。宿泊利用が可能となった場合で15名程度、浴槽も4名程度が入ることのできる規模である。また、女性の利用には今後さまざまな配慮と仕掛けが求められる。こうした点と今後のより頻繁な利活用を鑑みて「新湯憲章」を定めた(図7)。この憲章は、青森山田学園の校訓と関連づけた基本的な考え方を示す前文と、私たち人類が地球的規模の環境問題の改善・解決に向けて踏まえるべき指針を5つに整理したものである。

### 6. まとめ(身体性を伴う学びの位置づけ)

自然災害や地球規模の環境問題、未知の感染症の流行、脆弱な食料とエネルギーの自給率など、変化が激しく、予測困難な情勢の中、今般の学習指導要領の改訂においてもVUCA「Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)」を明示的に踏まえて、Society5.0での活躍を鑑みた主体性、リーダーシップ、創造力、課題発見・解決力、チームワークなどの資質を備えた若者の育成をうたっている。これらの資質は非認知能力であることはあらためて強調するまでもなく、上述した同プロジェクトの学び、学生の反応は、スナップショット的な結果と分析であるものの、身体性が伴う作業や労働、体験を通した暗黙知(Tacit knowledge)の形成が具体的に示されていた。合宿中、学生が担った物品の運搬や通路の修復、セメントの制作、炊事など単純な作業ほど協働や分担が必要になり、協

## 新湯憲章

新湯は、十和田八幡平国立公園第2種特別区域内に位置し、学校法人青森山田学園が約50年前に教育目的で設置したオフグリッド施設です。その豊かな自然環境は、野外での生活技術やコミュニケーション能力、災害対応力の向上だけでなく、地球的視野と未来志向の価値観を育む場となっています。

青森山田学園の校訓「誠実・勤勉・純潔・明朗」に基づき、私たちは以下を共通の行動規範とします。

### 1. 持続可能な規模の維持 (Carrying Capacity)

利用者数や活動内容が施設や環境に過度な負担を与えないよう、適正規模を常に意識します。

### 2. 自然との共生と技術活用 (Human Ecological Potentials)

太陽・地熱・雪・水・森林・生物の恵みに感謝しつつ、観光人材育成や、情報とエネルギーの地産地消などに組みます。生態系とのバランスを尊重し、最低限の影響と復元・再生を実践します。

### 3. 謙虚さと協働 (Values-based Education)

謙虚で素直な姿勢を重んじ、多様な人々との協力を大切にします。

### 4. 次世代への実践的継承 (Real-life Application)

利他を軸にした集合的無意識の考えに則り、新湯での学びを次世代の暮らしや人格形成に活かします。

### 5. 精神的指針 (Philosophical Foundation)

自我の意識は個人から集団、社会、宇宙へと進化する  
この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか  
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある  
正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識して  
これに応じて行くことである  
われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である

— 宮沢賢治『農民芸術概論綱要』序論より

## 図7 新湯憲章

力・共感・責任感がおのずと生まれ、そこに教育的な価値があることをここであらためて強調しておきたい。

昨今の教育の質向上をとりまく言説の中で、学びと身体性の統合への言及、意味づけ、実践例はあまり見当たらない。このような野外教育・体験学習をベースとした身体的な学びは、「頭と身体のバランス」や「知識や理論を問題解決に結びつける能力」のみならず、災害時の自立性とレジリエンス教育、いわばたくましさを含む全人性を育

む観点でも有効であり、生成AIが注目されるVUCA時代の人格形成に資する、より実践的で、価値を重視した教育 (Values-based education) に位置づけられるのではないだろうか。筆者ら3名は、2022年夏に岩手県安比高原に開校した英国のボーディングスクール Harrow International School Appi の教育実践を間近に観ながら、今後の日本の高等教育機関の学びのあり方や教職員の能力向上、その根底にある教育観に強い関心を抱いている。

現在、同プロジェクトには基礎スタンダードの地域貢献演習(2年生対象)、総合経営学部の1～3年ゼミ、社会学部のゼミが携わっており、卒業研究としては2024年度に社会学部で1件(前述の奥山・2024)行われたほか、2025年度はソフトウェア情報学部で2件が進行中である。今般の青森大学における大学・高専機能強化支援事業の導入やKDDI財団など外部機関の協賛の流れ、そして教育の質向上の潮流を踏まえると、新湯での学習機会は上述の学びの特徴の6つ目で触れた「文理融合、研究者間の協働、地域社会との連携が育まれる場」により近づき、青森大学の学びの特徴の一つになるであろう。そうした局地的な特徴に加えて、新湯憲章が掲げる地球的視野と未来志向の価値観を育む場としての5つの行動規範を踏まえて、地方の小規模大学における「実践型教育 (Experiential Learning)」と「身体性と学びの統合 (Embodied Learning)」の象徴的プロジェクトになることを目指して、私たちは関係者とともに同地の学びを卓越させるべく関わっていききたい。

## 文献

奥山奈々(2024)「野外宿泊研修の効果に関する一考察：青森大学の新湯再生プロジェクト合宿を通して」青森大学社会学部卒業論文

酒井軍治郎、宮城一男、岩井武彦(1964)「八甲田火山地域における温泉群の研究」弘前大教育紀要、別冊第4号、58p

高山幸克(2023)令和5年度青森大学八甲田新湯再生プロジェクト合宿報告書。日本技術士会東北本部青森県支部

## Potentiality of Shin-yu Restoration Project:

Touchstone for enhancing the quality of education

Toyoshi SASAKI <sup>1</sup>, Kimiharu TO <sup>2</sup>, Shinji SHIMOJO <sup>3</sup>, Kinji GOTO <sup>1</sup>,  
Wataru MAEDA <sup>1</sup>

1 Department of Business Administration, 2 Department of Sociology, 3 Department of Information Technology

### 要 旨

本稿は、2019年に青森大学が着手した「新湯再生プロジェクト」について報告する。本プロジェクトは、十和田八幡平国立公園内に位置する未電化・無電波の宿泊施設を再生し、教育の場として活用することを目的としている。国内の大学として極めて稀有なこの施設は、電気も通信もない環境下での実践的かつ身体性を伴う学びを可能にする。水道の復旧、浴槽修繕、環境整備、ICTを用いたモニタリングなど、複数年にわたる学生のフィールドワークを通じて、協働的労働が、チームワーク、コミュニケーション、問題解決力、レジリエンスといった非認知能力の育成に寄与している。日本技術士会やKDDI財団をはじめとする外部支援を得ながら、本プロジェクトは野外教育、GX・DX、地域社会との連携を統合して展開している。結果として、身体を伴う作業や共同生活が、暗黙知の形成、責任感、環境意識の涵養に重要な役割を果たしていることが示された。国立公園という稀少な教育実践の場として、新湯は高等教育の質向上の試金石となるとともに、地域活性化に貢献し、VUCA時代における学際的知識創造の推進という日本の教育政策とも軌を一にしている。

**キーワード：** 野外教育、非認知能力、文理融合、地域社会との連携、身体性と学びの統合